

私の 子ども



大陸で育つた私

時代 (6)

今井百^も里^り江^え子^こ

私は、一九一六年（大正五年）六月七日生まれ、今年満七十八歳です。「私の子ども時代」という題で話し始めますが、私の記憶にある、年齢や出来事が、数え年と満年齢のように現在と、多少、食い違いがあるかもしれない事を、最初にお断わりしておきます。

私の両親は、明治四十一年、父が四十歳の時、二十歳の母と結婚（初婚同志）しました。すぐに

父は、外務省から派遣されて、中国海^{シヤンセン}関封弁の任に就き、母を伴って渡中しました。日清日露戦争の後で、要所に日本人が配属されていました。父も、旅順、北京、上海、安東（現・丹東）、福州、大連、營口（牛莊）と、港々を転勤しました。結婚以前の父の事はよくわからないのですが、高等予備門で夏目漱石と同級生だったようです。その後漱石は東京帝国大学文学部に、父は工学部に進みました。ともにイギリスへ留学しまし

たが、漱石は、病を得て帰国したのに、父はケンブリッジからマンチェスターの工場へと勉学の場合を移しイギリスの生活を楽しんだのでしょう。英語が達者なので、中国海関に派遣されたようです。父母は、夫婦二人の生活を大切にしたらしく、三男三女に恵まれた後も、父が母を大切にすると評判だったそうです。私が、營口の日本人小学校一年の大正十二年九月二十九日（関東大震災の月の終わりです）に、父は、朝、頭が痛いと言つて仕事を休み、そのまま、脳溢血で亡くなりました。学校の先生から、「早く帰りなさい」と言われ、理由もわからないまま帰宅したら、家の前に花輪がたくさん並んでいたのを覚えてます。

母は、明治二十一年五月五日生まれで、高等小学校を卒業した後、私立の女学校に入學。そこで後の十文字学園創設者、十文字こと先生に教わっており、教師として素晴らしく、お教への内容も立派だったので、後に、私が「東京女子高等師範

学校を受験したい」と言った時は、「十文字先生が出られた、あの学校なら」と承諾してくれました。母は二十歳で、二十歳も年上の男性と結婚して、よく、中国へ渡ったものだと思います。父が亡くなった時は、一番下の弟を妊娠していて、東京へ帰ってから産んでいます。長女・万里子は大正二年上海生まれ、次女・千里子は大正四年安東生まれ。私、百里江子は、大正五年福州生まれ、長男・春雄は大正八年、次男・義雄は大正十年、三男・実は大正十三年、弟達は東京（現・台東区谷中三丁目）で生まれました。私が七歳の頃、營口で猩紅熱が流行し、次女千里子が亡くなりました。家の囲りが消毒薬で白くなり、「ちー坊はの様なになったよ」と、父が白木の箱を抱いて帰ってきたのを覚えています。春雄は、昭和四十三年冬山で遭難死、義雄は北支で昭和十九年戦病死しました。

両親の実家は、両家共、徳川家直参の旗本でし

たから、明治維新後の士族には、価値観も、生活そのものも大変な変わり様だったでしょう。母方の祖父や、曾祖父の話には、勝海舟や榎本武揚等の名がよく出てきましたし、曾祖父は、御維新前に幕府の遣欧使としてフランスのナポレオン三世に謁見のため派遣された一行の中の一人でした。

彼は、エジプトのスフィンクスの前で初めて写真を撮られた日本武士の一人です。その写真なども、戦災で焼けてしまいましたけれどね。でも、彼がヨーロッパへ行っている間に、幕府の方針が変わり、日本へ帰ってくると、閉門蟄居を仰せつけられてしまいました。扶持ふちを離れてしまった訳です。でも、大政奉還後、英語、オランダ語ができ、ヨーロッパを知っているというので、大審院に籍を得たのです。この様に、母の里方は、良いも悪いも開化に関係しており、母も、開化や士族の心の持ち方、時世に添う生き方の大変さを、子ども心に感じて育ったと思います。母の叔母は、

本郷教会の牧師と結婚して、カリフォルニア大学に留学のためロサンゼルスに渡っています。短歌をよくする人で、夫と共にグロースリーストアーを営みながら、在住日本人の新聞（羅府新報）に短歌指導や、随筆を書き、狩野派の絵もよくする人でした。

こうしてみると、私の父は留学したし、母も、外国で暮らす親族を間近に感じて育っています。子どもというのは、父親母親のルーツを、身分や教育ではなく、人間としての感性のルーツを伝引き継ぐのではないかしらと思えてくるのです。

私は、子ども時代を外地ですごし、日本を内地と呼んで育ちました。回りにはその時々、モンゴル、イギリス、ロシア、オランダ、中国と、いろいろな国の人達がいきました。長じて中国との競争になった時も、私は中国の人を憎いと思った事はありません。だって、身近にいたアマやボーイ

達は、生い立ちは違っても、とても良い人達でしたもの。戦争で心底、口惜しいと思ったのは、弟の戦病死について調べた時です。北支の病院で、何十人かの兵隊が、同じ日付で、同じ病名で死んでいるのです。そんな事がある訳がない。事実ではないと思った時、その部隊が南方洋上で全滅、生還者九名との事を知りました。可哀相に、何と無残な、と思いました。女高師の学生時代、南京陥落等々の度に、旗行列、提灯行列に参加させられました。意識は別に在りました。今の若い人達は、どんどん海外へ出て、買物をするだけでなく、そこに住み、人を愛するといいですよ。現地では、日本人がちゃんとしていけば、現地の人とちゃんとしたおつきあいができる、その事が大きな意味を持つと思いますよ。

話がそれましたが、当時、両親は、中国人をアマヤボーイとして、英語で使っていたし、他国の人と話すのも英語でした。中国語は地方により異

なっていて、北京語では通じないためでした。母は仏教徒でしたが、日本から仏教関係者が来ていなかったもので、教会で宣教師や邦人の奥様方とおつき合ひし、日曜日には子ども達は日曜学校へ行きました。賛美歌や童謡を白人の子ども達と英語で歌っていました。満州では、不景気な日本から、多くの日本人が渡って来ていました。彼等と、以前から居る私達はどこか違っていたように思います。日本人小学校の校長先生も、日本からいらしてましたが、休みの日に父が話しに行くのについてお宅に伺った時なども、すごく丁重にもてなされ、子ども心にも、日本人間の格差を感じたものです。营口では、旧市街と日本人学校のあたる新市街とに分かれており、はじめは旧市街の煉瓦造りの洋館に住んでいました。すぐ近くに遼河リャウハの堤防があり、中国の青い帽子の兵隊が剣付鉄砲を持って立っていて、夕方、ラッパが鳴ると隊へ帰って行きました。遊んでいた子ども達も、ラッ

バが鳴ると家へ帰ったものです。日本人は多くても、満鉄病院以外の日本人の開業医は少なく馬車で往診に来られたり、私達は、日本から連れてきていた車夫に引かれて、人力車で通院したりしました。母と一緒に医院に行った時の事ですが、待っている間に、アマに連れられて村の包ポキのようなテントに行った事があります。中では、弁髪の人達が、座って頭を敷物につけて拜んでいました。何教だったのでしょうか。怖いような、不思議の国のような、奇妙な体験でした。家の暖房はストーブ、燃料は石炭でした。貯炭場の周りにはコーリヤン畑が広がり、遼河の堤防にはすすきが風に揺れて、ずっと彼方でないと山は見えませんでした。大連ではアカシア（ニセアカシア）の並木が続いて、土塀があり、ゴルフ場も近くにあり、私達は父のおともをしてボーイを連れてよく遊びに行きました。又、母が「うちへいらっしやい」と言うので、友達が家へよく遊びにきまし

た。子ども部屋があり、日本からとり寄せた『子どものくに』（婦人の友社）や人形、母が作ったお手玉などで遊びましたね。おやつはビスケット、キャンディと紅茶で、友達は喜んで食べていましたよ。そんなある日、彼等が帰った後、弟が「ママ、僕のご本がない。持っっちゃった」と言うのです。それを聞いたボーイが追いかけて行きました。母は「あら、そう？ 持っっちゃったのではなくて、あなたが貸してあげたのでしょうか？ 見たい人には見せてあげなさい。大きくなってよそで本を貸していただいたら、お借りしたものはちゃんと返すですよ」と、そんな風でした。あの頃の我が家は恵まれている方だったと、今になって分かりますが、あの、母のヒューマンな気持ちはどこから来たのかと考えます。母は、召使いを叱ったり、さげすんだり決してしませんでした。又、子どもがどんなに幼くても人格を認めてくれ、兄弟間でも互いの名を呼ばせ

て、お姉さま、お兄さまとは呼ばせませんでした。夜、夫婦で出かけなければならぬ事も多く、大人の世界と子どもの世界をきっちり分け育てましたね。編み物、洋裁、英会話を牧師の奥様から習っていて、子ども達の洋服は手作りでした。私の七歳位の時の写真は、母の手作りの洋服を着て、ネックレスをしています。日曜学校のクリスマス劇で、天使役をした時の白い衣裳も作ってくれました。翼は本物の白鳥(?)の羽根だったのではないかしら。靴は三歳頃までは綿子地に刺しゅうのあるきれいな極彩色の中国靴をはいて育ちました。母の手廻しのシンガミシンは、今も我家にあります。今となっては貴重なものとなりましたね。そして、母の色彩や配色は、つまり、母が染めさせた着物の色合いや私達に作ってくれた洋服の色合いは中国風で、赤、青、黄色が入っていて、くすんだ色合いは無く、粹というのとは違っていました。このように、七歳ま

で日本らしい物とは無縁で育った私は、東京へ帰って来て、皆、和服だし、暖房が無く寒いので、最小限度の和服はあったけれど、とうとう着物になじめず、今でも自分では帯も結べないでいます。食事も洋風でしたから、焼き魚、みそ汁、たくわん、納豆が食べられませんでしたよ。

父が亡くなり、十月になって関東大震災の後初めて大連に入港した日本の貨客船で日本に帰って来ましたが、見る物聞く物全てが不思議でしたね。鉄道は不通になっているので、人力車で家までの途中生々しい焼跡や死体のようなものその他は一望千里、何もありませんでした。帰国後すぐに、当時の下谷区谷中尋常高等小学校一年生に転入しました。震災の後だったから被災者だと思われたでしょう。教科書や、肩からかける鞆も頂きましたし、可哀想に思ってたか、皆、親切にしてくれました。中でも、隣の席の女の子がよくしてくれたのですが、その子は皆から疎外されてい

るの様なです。後で、韓国の人だと分かりました。そういう時代でした。関東大震災は、大陸では「日本全滅」と報じられていて、やっと貨客船の三等の切符が取れて帰ってきた訳ですが、当時の私は、場所の取り合いをしなければならぬ三等に乗るのも、父が亡くなったためだとショックでした。母は着飾る人ではありませんでしたが、装飾品や着物なども、大陸からは一部しか持ち帰れず、やっと持ち帰った裾模様を着物等も、父が亡くなり、子ども達のためにつましく生きようとしたのでしょ、呉服屋さんにつつましく生きたようです。ある日、弟が竹の輪のおもちゃがほしいと言った時、私は「うちはパパがいないからわがままを言つてはだめ。これからは、ママの買って下さる物以外をおねだりしちゃだめよ」と、おませな事を言ったものです。

翌大正十三年七月、子ども達が小さいから体のためにと、郊外に家を建て、移りました。地名

は、豊多摩郡落合村下落合。足袋もはかず、わら草履で、袴もつけずへこ帯だけの子ども達がいる小学校へ行った時は、ひどいカルチャー・ショックでした。村の学校は落合第一小学校だけでしたが、震災で家を失った人達が郊外へと移住し、児童数が増えて収容しきれず、落合第二小学校がつけられました。私達兄弟はそこに転校しました。小学校を四度かえたわけです。

でも、こうした事は、日常の自分の境遇が急変しただけで、とまどいはあっても性格にまでは深く影響していかないように思います。私が今、敗戦後、精神的に立ち直ることができたのは、塚本虎二先生の集会で授かった信仰の故だと思います。そこに辿りつくまでの道程に母の愛がありました。母の行動を見て育ったからだと思えます。母はクリスチャンではなかったけれど、牧師の妻としてアメリカに渡った叔母や、大陸での牧師夫妻とおつきあい、そして、母自身が元士族で、格式は

あっても決して豊かではない家で、厳しく物を大切にと育てられた事が大きいでしょう。母は、士

は扶持を頂く、農工商はお金を働いて得るけれど、農は自ら作る、だから尊いと教えました。

又、物の命という事をよく言いましたね。「勿体ない」が口ぐせでした。ですから母の言う「ボロ」は「真正正銘のボロ」でしたよ。「粗なれども卑ならず、貧なれども賤ならず」という意味の言葉があるでしょう。間違っているかもしれないが、

「清貧」にも通じる大好きな言葉です。今と比べると当時は本当に質素でしたよ。戦時中は、言語に絶する位物資がなかったけれど、畑から盗むなんて事はできませんでしたよ。金目の物を身につけなくても、趣味良く、人間の品性が自

ずから外に滲み出る人になりたいものです。非常に難しいけれど、親が家庭でそれだけの心構えがあると、何分の一かは子どもにも伝わると思うの。外には見えなくとも、自分はそうありたいと思う

だけでもいいと思います。

子ども時代というのは、周囲の人の「人としての在り方」に触れて育つ時、それが家庭教育だと思えます。親の心の在り方が、その子の人間性のルーツになるのです。知識とか、将来のためなどとは無縁のものでしょうね。(談)

(お茶の水女子大学名誉教授)

